



Relief

[リリーフ]

CONTENTS

- 2022年度 小・中学生「いのち」の作文コンクール表彰式
- 2023年度 AED訓練器等助成先決定
- 2023年度 公募助成先決定
- 2022年度 第4回いのちのセミナー
- 2022年度 安全セミナー
- 2022年度 公募助成活動紹介
- いのちのセミナー (WEB) 再配信のお知らせ

2023
APRIL
Vol. 46



2022年度「小・中学生『いのち』の作文コンクール」表彰式を開催

2022年度も近畿2府4県に在住・在学の小・中学生の皆さんから、「あなたにとっての『いのち』」をテーマとした作文を募集し、約5,000名の方からの応募をいただきました。「いのち」の誕生や成長などへの心からの喜びが綴られた作品がある一方で、自らの辛い体験や生き辛さなどの悩みと真剣に向き合い、考え、前向きに生きていきたいといった思いが綴られた作品も数多く寄せられました。

選考の結果、「いのちの作文大賞」4名、「優秀賞・選考委員長賞」6名、「優秀賞」20名、「入選」70名が決定しました。



《いのちの作文大賞受賞者》記念写真



《優秀賞・選考委員長賞受賞者》記念写真



《優秀賞受賞者》記念写真



選考委員長 重松清氏による講評

表彰式の様子

2022年12月18日(日)、毎日新聞オーバルホールにて開催しました。当日は、「いのちの作文大賞」、「優秀賞・選考委員長賞」、「優秀賞」の受賞者とそのご家族や学校関係者、約100名の皆様にご参加いただき、理事長から受賞者一人ひとりに、表彰状を授与いたしました。

その後の重松清選考委員長からの講評では、冒頭、一人ひとりが一生懸命書いた作文は、選考委員をはじめ、スタッフ一同一生懸命読ませていただいた、それだけ読みたくなるような力のある作品だったと述べられました。

続いて、受賞した30作品を、「大切な家族のいのちについて書いた作品」、「自分自身のいのちについて書いた作品」、「『今』(現代)を感じさせる作品」、「動物、昆虫、植物などの身近で小さないのちや、そこから自分や家族のいのちに思いを馳せる作品」に大別し、受賞者一人ひとりに対して、それぞれの作品への心のこもったメッセージが伝えられました。

最後に、総評として、「いのち」について様々なことを考えさせてくれた30編の作品は、かけがえのない素晴らしいものだったこと、「いのち」を描く手段が他にもある中で、言葉を用いて「作文」として描いてくれたのが何よりも嬉しいこと、「いのち」をめぐる作文に「正解」や「模範解答」はなく、「『いのち』とは何だろう?」と考えること自体が「正解」であることに触れ、言葉は上手に使いこなせないこともあるが、何とかして言葉で描こうと頑張ったこと自体に大きな価値があり、今後も「いのち」と「言葉」と末永く付き合い、大人になっても「いのち」について考えてみてほしいとして、一生懸命に「いのち」に向き合っただけの敬意が述べられました。

表彰式当日、「いのちの作文大賞」受賞者のみなさまからコメントをいただきましたので、紹介させていただきます。



小学1・2年生部門

大津市立下阪本小学校
2年

紺野 隆之介さん

<受賞コメント>

(学校から持ち帰ったアサガオが)一回枯れたと思ったけど、もう一回咲いてうれしかったからこの作文を書きました。



小学3・4年生部門

神戸市立竹の台小学校
4年

空閑 晴彦さん

<受賞コメント>

僕はタマムシのたま子を育てたときのことを作文に書きました。大好きなたま子の作文が大賞に選ばれてとてもうれしいです。ありがとうございました。



小学5・6年生部門

姫路市立手柄小学校
5年

鈴鹿 巧さん

<受賞コメント>

このような大きな賞をいただき、ありがとうございます。僕は虫が大好きだったので、みなさんにも小さいのちについて少し興味を持っていただいたらうれしいです。そして僕は、重松先生の大ファンなので、お会いすることができてうれしいです。



中学生部門

彦根市立中央中学校
3年

中井 柚姫菜さん

<受賞コメント>

中学生最後の『いのち』の作文コンクールでこのような大賞を受賞できてとてもうれしいし、母も喜んでいてかと思っています。ありがとうございました。

受賞者一覧 (敬称略)

★いのちの作文大賞(4名)

府県	学校名	学年	氏名	題名
滋賀県	大津市立下阪本小学校	小2	紺野 隆之介	くりかえすアサガオのいのち
兵庫県	神戸市立竹の台小学校	小4	空閑 晴彦	たま子が教えてくれたこと
兵庫県	姫路市立手柄小学校	小5	鈴鹿 巧	命のおすそわけ
滋賀県	彦根市立中央中学校	中3	中井 柚姫菜	いのちの証

★優秀賞・選考委員長賞(6名)

府県	学校名	学年	氏名	題名
京都府	私立同志社国際学院初等部	小1	加納 陸	「ぼくのマイブーム」
和歌山県	私立智辯学園和歌山小学校	小3	延與 晟一良	カタツポの命
京都府	京都教育大学附属京都小中学校	小5	永井 雄大	バイバイ
兵庫県	神戸市立こうべ小学校	小6	清水 權	ぼくのいのちの音
京都府	京都市立久世中学校	中1	南 俐亜	コロナ禍で気付けた事
大阪府	東大阪市立高井田中学校	中2	中西 拳敏	そんな時間が好き

★優秀賞(20名)

府県	学校名	学年	氏名	題名
兵庫県	姫路市立旭陽小学校	小1	鶴岡 一有	せみの命
兵庫県	姫路市立伊勢小学校	小1	仁後 颯太	「ぼくとかぶとむし」
和歌山県	私立智辯学園和歌山小学校	小2	鳥 翔太郎	いつもいっしょに
和歌山県	私立智辯学園和歌山小学校	小3	上村 晃司	魚と一緒に泳げるよ
大阪府	私立大阪信愛学院小学校	小4	秀坂 瞳	私の命
大阪府	大阪市立大淀小学校	小4	宮本 一世	カナブンの命
大阪府	大阪市立堀江小学校	小5	相本 花奈	命をつなげるひまわり
兵庫県	福崎町立福崎小学校	小6	牛尾 明日暎	「ぼくの名前」
兵庫県	姫路市立広畑第二小学校	小6	加藤 野々香	いのちをつなぐ音楽の力
兵庫県	姫路市立船津小学校	小6	福永 倫大朗	かけがえのない命

府県	学校名	学年	氏名	題名
京都府	京都市立上京中学校	中1	岡田 晴介	祖父の初盆
滋賀県	長浜市立南中学校	中1	角川 心美	ありがとうじいちゃん
兵庫県	私立神戸学院大学附属中学校	中1	宮野 修弥	どう最期をむかえるか
京都府	京都市立開明小中学校	中2	表 桃花	「自分らしい冒険をすること」
滋賀県	私立近江兄弟社中学校	中2	夏原 凛愛	当たり前とは
京都府	京都市立中京中学校	中2	安田 千桜	満たされた命
奈良県	奈良市立富雄南中学校	中3	黒田 奈菜	「津波でんこ」から学ぶ命の守り方
大阪府	門真市立門真はすはな中学校	中3	中島 そら	長く生きることが幸せ?
京都府	京都市立北野中学校	中3	仲 水蓮	いのちのカウントダウン
滋賀県	長浜市立びわ中学校	中3	中村 梓	インターネットのいのち

受賞者一覧 (敬称略)

★入選 (70名)

府県	学校名	学年	氏名	題名
滋賀県	甲賀市立真生川小学校	小1	田中 景大	うまれたときのしゃん
滋賀県	野洲市立野洲小学校	小2	田中 杏弦	コオロギのしあわせ
滋賀県	草津市立老上西小学校	小3	河内 優我	ぼく明日もがんばるよ
滋賀県	彦根市立河瀬小学校	小3	木村 来夢	18さいでさげたいのち
滋賀県	野洲市立祇王小学校	小4	山崎 心実	命の大切さ
滋賀県	大津市立立上中学校	中1	浅田 遥	尊い命
滋賀県	大津市立仰木中学校	中1	安達 桜咲	「なぞ」
滋賀県	大津市立仰木中学校	中1	長谷川 小梅	私達のやるべき事
滋賀県	大津市立仰木中学校	中2	森 はな	いのち
滋賀県	大津市立打出中学校	中1	新井 洵乃介	いのちの大切さ
滋賀県	大津市立打出中学校	中1	深尾 結菜	生きる
滋賀県	彦根市立鳥居本中学校	中1	土田 瑚珀	私の誕生日
滋賀県	私立近江兄弟社中学校	中1	箕浦 摘記	生きること、死ぬこと、そしていのち
滋賀県	私立近江兄弟社中学校	中2	山脇 結菜	あたり前のありがたさ
滋賀県	大津市立立吉中学校	中2	小川 かほる	植物の命に触れたとき
滋賀県	彦根市立中央中学校	中2	堀江 夏妃	「みんな同じ命」
滋賀県	彦根市立南中学校	中3	山下 由莉	おじいちゃんと私
京都府	京都教育大学附属京都小中学校	小1	盛田 瑞希	たべもののいのち
京都府	京都教育大学附属京都小中学校	小3	古株 陽茉莉	その時その時を大切に
京都府	長岡京市立長法寺小学校	小2	中出 瑠美	「わたしの心ぞう」
京都府	木津川市立城山台小学校	小4	森本 琉奈	二平方メートルの世界で読んで
京都府	京都市立旭丘中学校	中1	藤井 愛莉	人生の本
京都府	京都市立西京高等学校附属中学校	中1	渡邊 あい	「生きる」
京都府	京都市立開晴小中学校	中2	小笹 孔莉	いのち
京都府	京都市立開晴小中学校	中3	早川 聡美	「母の言葉」
京都府	私立立命館宇治中学校	中3	上田 幸華	「いじめ」と「希望」
京都府	綾部市立豊里中学校	中3	大島 歩未	尊いだけじゃないのが命だ
大阪府	大阪市立真田山小学校	小2	河村 寛太	おばあ長生き大作せん
大阪府	大阪市立西九条小学校	小4	島村 幸典	駅から広がる命の世界
大阪府	富田林市立富田林小学校	小4	田守 梨華	命はみんなの大切なもの
大阪府	大阪市立大淀小学校	小5	田中 道啓	生きるために食べる命
大阪府	島本町立第一小学校	小5	田村 優奈	「命って何のためにあるんだろう」
大阪府	大阪市立北田辺小学校	小6	音野 アリシア	自然とともに生きる
大阪府	私立上宮学園中学校	中2	坂巻 優月	私にとっての命
大阪府	大阪市立都島中学校	中3	小畑 春翔	命を育む

府県	学校名	学年	氏名	題名
大阪府	大阪市立都島中学校	中3	中山 涼琴	だから私は対話する
兵庫県	姫路市立別所小学校	小1	松本 大知	つながるいのち。けんけつでけんけつ。
兵庫県	姫路市立安室小学校	小2	松尾 奈々帆	大せつないのちでつよく生きていた
兵庫県	姫路市立安室小学校	小3	森口 璃乙	わたしのお兄ちゃん
兵庫県	私立神戸海星女子学院小学校	小4	齋藤 愛果	命の大切さ
兵庫県	加古川市立平岡小学校	小5	網盛 希乃花	「大人のけんか」
兵庫県	姫路市立香呂小学校	小5	高田 結奈	誕生した新しい命
兵庫県	兵庫教育大学附属小学校	小5	徳岡 羽汰朗	いのち
兵庫県	私立甲南小学校	小6	井野上 碧泉	笑顔のお好み焼き
兵庫県	福崎町立福崎小学校	小6	隅田 悠太	「命をもらって生きるといふこと」
兵庫県	姫路市立船場小学校	小6	吉田 更紗	いのちの支え合い
兵庫県	播磨町立播磨南中学校	中1	告野 由宇	命の大切さ
兵庫県	姫路市立山陽中学校	中1	中野 早都	「大切な言葉」
兵庫県	私立関西学院中学部	中1	和田 いおり	いま、ここに生きている
兵庫県	私立関西学院中学部	中2	荒井 祐香	「一つのいのち」
兵庫県	私立関西学院中学部	中2	八木 優貴	祖母といのち
兵庫県	神戸市立有野中学校	中2	山口 拓海	救急救命士講習を受けて
兵庫県	私立須磨学園夙川中学校	中3	工藤 優華	感情
兵庫県	尼崎市立小園中学校	中3	原 舞汎	救えるいのち
兵庫県	尼崎市立小園中学校	中3	山岡 奏心	「いのち」の証
兵庫県	尼崎市立小園中学校	中3	米山 穂香	命を考える
奈良県	生駒市立生駒台小学校	小3	橋本 成美	いのち
奈良県	奈良市立興東小学校	小5	奥田 倅成	弟が生まれた日
奈良県	香芝市立香芝西中学校	中2	角谷 美桜	あたりまえの一日
奈良県	香芝市立香芝東中学校	中2	田路 梨心	命の大切さとこれからの決意
奈良県	奈良市立富雄南中学校	中3	岩田 紗季	笑顔の仮面の裏
奈良県	奈良市立富雄南中学校	中3	天雲 悠斗	僕と猫
和歌山県	私立智辯学園和歌山小学校	小3	佐久間 暲	命について
和歌山県	私立智辯学園和歌山小学校	小3	前田 結衣	命をふきこむこと
和歌山県	高野町立高野山小学校	小3	加勢田 悠生	「あしたも野球がんばろう」
和歌山県	和歌山市立岡崎小学校	小6	遠矢 真大	命は一つ
和歌山県	上富田町立上富田中学校	中2	尾崎 友咲	一日、一日を大切に
和歌山県	和歌山県立きのかわ支援学校	中3	大久保 颯人	「命」からのメッセージ
和歌山県	和歌山大学教育学部附属中学校	中3	佐々木 健人	僕の弟
和歌山県	岩出市立岩出中学校	中3	巽 由奈	「五文字の重み」

いのちの作文大賞 受賞作品

「くりかえすアサガオのいのち」
 大津市立下阪本小学校 二年 紺野 隆之介

一年生のとき、学校で一人一こずつプランターでアサガオを育てることになった。ペットボトルのジョーロを作り毎日水をあげた。夏休みになったら自分のアサガオを家にもってかえってかんさつすることになっていた。でも夏休みちよくぜんかぜをひき三日間学校を休んだ。その間にアサガオはかれてしまった。夏休みのしゆくだいのアサガオのかんさつプリントに一つも色がぬれなくなってしまった。ぼくはしょんぼりした。

でも夏休みしょ日にむらさきのきれいなアサガオが一つさいた。すっかりあきらめていたのに。すぐうれしくてさい高の気分だった。ぼくはかんさつプリントの一つ色をぬった。その日から毎日アサガオがさいた。一つ二つ三つ四つ。プリントには一日八つまでしかぬれないのに、それい上さいた日もあった。一どかれたように思えたアサガオがこんなにたくさんで。毎朝アサガオを見るたび元気がでた。八月の終わりに近づくと、アサガオはかれはじめて、たねをつけはじめた。さよならのときだ。アサガオのかれたつるをさくさくするの工作につかった。

今年の六月くらい、去年アサガオのプランターをおいていたじめんにかわつた大きが生えていることにきづいた。「ざっそうかな？」とはじめは思った。しばらく育っていくのを見まもっていたらつばの形が去年育てていたアサガオによくにている。「まさか？」と思いながらも毎朝水をあげることにした。ぐんぐん育った。おじいちゃんやしちゅうをたててくれた。しちゅうに、ぐるぐるとツルがまきつく。夏休みになって二日目むらさきのアサガオがさいていた。びっくりした。まさか今年もまたアサガオにあえるなんて。

アサガオの生命力のつよさにぼくは二年れんぞくでおどろかされた。こうなると来年の夏にもアサガオにあらいたくなってくる。よし、このぼしよをアサガオゾーンにしよう。

いのちの作文大賞 受賞作品

「たま子が教えてくれたこと」
 神戸市立竹の台小学校 四年 空閑 晴彦

去年の夏、ぼくには一緒にすごした友だちがいた。その子はとてもきれいできらきらして、とっても食いしんぼうだった。毎日遊んだ友だち、その子の名前はたま子。ヤマトタマムシの女の子だ。

たま子と出会ったのは八月八日のことだった。公園に行こうと外に出たら、すぐ前の道路に、たま子がペタリとすわりこんでいた。本物のタマムシを初めて見たぼくは、うれしくて大急ぎで走ってかけより、そっとたま子をつかまえた。たま子にはげようとしなかった。ぼくは帰るとすぐに凶鑑でタマムシの事を調べた。すると、タマムシはとてもせんさいで、よく拒食症になってしまおうと書いてあってぼくはびっくりした。拒食症だなんて、まるで人間みたいだ。だから毎日ぼくはエノキの葉を取りに行った。たま子はエノキ以外の葉は食べなかつたし、エノキが少しでも枯れていたり、よごれていると食べない。だから毎日活き活きとした濃い緑の葉をぼくは探さなければならなかつた。大変だったけど、おいしそうにシヤクシヤクと食べるたま子を見ていると、ぼくは幸せだった。

秋になるとたま子は弱っていった。そして十月九日、とうとう死んでしまった。たま子とぼくは六十三日を一緒にすごした。たま子はふつうのタマムシの三倍も長く生きてくれた。ぼくは大声でわあわあ泣いた。毎日ごはんをあげて大切に大切に育てた分、別れがこんなに悲しいんだと思った。そして泣きながら気付いた。ぼくに毎日ごはんを作ってくれていてお父さんやお母さんも、もしぼくがいなくなつたら、こんな風に悲しくて苦しい思いをするんだと。だからぼくは自分の命も大切にしないかならないんだと。どの命もだれの命も、大切にしている家族がいる。だからみんなも大切にしないでいい。そんな大事なことをたま子が最後にぼくに教えてくれた。そう思つてぼくはまた大きな声で泣いた。

「命のおすそわけ」
 姫路市立手柄小学校 五年 鈴鹿 巧

五月、学校の校門に植えられているパンジーやビオラの花畑に黒と赤のいかついトゲトゲした子がわがもの顔でうごめいている。ツマグロヒヨウモンというタテハチョウ科のチョウの幼虫だ。毒々しい姿ではあるが、性格は穏やかで、そのとげはやわらかく、毒もなく、刺すこともない。僕の大好きな蝶だが食欲がすごくて、一匹いたらパンジーは、丸裸にされてしまう。そのためきらわれる。

四月、新学期には満開のパンジーには、この幼虫たちがたくさんいて、先徒たちが「先生、毛虫がいっぱいいるよ！こわい！」と訴えて、あわてて先生たちが駆除に走るので僕は気が気でない。今年は気候が寒く、出はじめたのは花がしおれてしまった五月も半ばだったので、注目されず安心してた。

でもパンジーは花がしおれると、すぐ次の花に植えかえられてしまう。どうせ捨てるならそれまで幼虫たちにたくさん葉っぱを食べてもらって、大きくなって、立派に羽化してほしいと思った。そこで僕は毎日のように幼虫をできるだけ目につかないパンジーの鉢に移してみんなの目から隠すようにした。

野生の蝶の羽化は1%程度だ。それは気候の影響だったり、天敵の鳥や人間によって駆除されたり、寄生虫のえじきとなるからだ。そんな中、奇跡的に蝶になれたものたちは、花の間を飛んで受粉を助けていってくれている。みんな命をつなぐ大切な役割を任うのだ。ある日、パンジーの鉢と葉っぱは、蛹のた

くさんついた茎ごと、根こそぎ掘り返され、鉢の縁の蛹も全て取り外して捨てられて、土だけになっていた。そしてその数日後には別の花が植えられた。僕はがっかりした。

僕の住む姫路市でジャコウアゲハは市の蝶なので手厚く保護され、あちこちに食草であるウマノスズクサが育成されている。幼虫も成虫を捕ることも禁止されている。けれど他の蝶は基本害虫扱いだ。モンシロチョウはキャベツ、アゲハチョウはみかん、ツマグロヒヨウモンはパンジー、花や野菜を育てたり、大切にしている側の立場の人たちからすると、蝶の幼虫たちは憎い敵だと思ふ。楽しみにしていた花を枯らし、食物をだめにするやつをどうしてわざわざ育てるようなことをしたいと思ふだろうか。

でも、見ごろを過ぎた花、作物を収穫し終わったあと、葉っぱをどうせ捨ててしまうならば、蝶が巣立つまでのほんの少しの間、新しい命におすそわけをしてあげてほしい。

害だけじゃない。彼らは、蝶になれば花の受粉を助け、命を、実を育ててくれている。だから幼虫たちが蝶になり飛び立つまでの食糧として、隠れ家として、ほんの少しの間分け与えて、命をつながせてあげてほしい。

それが「自然と共に生きることわり」ではないのか。蝶の舞う町はきつと、人の心も、自然も豊かにしてくれる命のかけはしとなれると思う。

いのちの作文大賞 受賞作品

「いのちの証」

彦根市立中央中学校 三年 中井 柚姫菜

8月15日は終戦記念日です。テレビでは、戦後77年たったと報じています。

私にとってはとてつもなく昔の話ですが、戦争によって310万人の人が命を落としていったのです。以前は、このようなニュースを聞いても特別何かを感じることもなく「ふーん。そうなんだ。」と思うだけでした。しかし、修学旅行で広島に行ったことを思い出し、原爆ドームなど大変悲惨な現実があったことを目の当たりにしてきた今は、それらを深く理解し大切ないのちが失われていったこと、また、同じことをくり返さないことを再度心に刻みました。他国では、今だに戦争がくり返されています。失われる命は戦争だけでなく、事故、殺人、自殺、虐待、病気などさまざまニュースがメディアで流れている毎日です。これらの失われる「いのち」のことを思う時、私には一生忘れられない「いのち」があったことを思い出すにはいられません。

母は私が小学6年生の時にこの世を去りました。母の「いのち」を思う時、それは母が生きた証のことであると思えるのです。今一度私が知る母のいのちの証をたどってみたいと思い、この作文を書くことを決めました。

母は40年という灯りのろうそくを持って生まれてきました。母の幼い頃のことはそんなにたくさん知らないけれど、写真で見る小学生の母は私とそっくりで、自分がタイムスリップしたのかと思ったことがあります。母は私と妹に「いのち」をくれました。私は12年余り母と共に生き、いのちの証という思い出を作ってきました。この頃、母のいのちの灯りが消えるなど思いもしませんでした。

そして、それは私が小学3年生の時に突然やってきました。

母が病気で入院して手術を受けなければならなくなりました。私も毎日の生活が全く変わってしまうことに従うしかありませんでした。誰よりも大好きな母のいのちのため、家族全員で懸命に尽くしました。治療によって、薬の副作用で見えられないような日々もありました。しかし、母が懸命に戦っている姿は一生忘れることはありません。そして、どんな時もいつも自分でありたいと努力していました。悲しくてつらくて、くやしくて多くの思いが母にはあったと思います。大声を出して泣きたい時もあったでしょう。「なぜ？」と恨みたい時もあったでしょう。でも、母は私たちの前では決して弱みを見せることはありませんでした。いつも前向きに生きていました。必死の思いで生きていました。

やがて、3年半がたった頃、最後の入院時に母はどうしても家に帰ることを希望しました。訪問診療、訪問看護、福祉用具などが大急ぎで整えられ、母の望みはかなえられました。最後の一週間の始まりでした。点滴、酸素の管をつけて我が家で私たちと同じ部屋で眠り、私たちを見つけて過ごしました。私たちを残していくことの不安や悲しみは、どんなに大きかったらう。その当時は、それらを察することはまだ出来ませんでした。しかし、今、母のいのちを思う時、はかり知れない母の思いが胸いっぱいこみあげてきます。

そしてとうとう、まだ雪が舞う季節に静かに母のいのちのろうそくは消えていきました。母は、私の卒業式や入学式の時に手紙を残してくれました。突然祖母から渡された手紙は、涙でなかなか読むことができませんでした。最後につづられた「ゆきちゃん、大大好きだよ。」の言葉に涙があふれ出しました。私は今回母の「いのちの証」を追い、改めて母を思い出し、いのちについて考えることができました。

母のように、いつでも笑顔で前向きな自分でいられるようになりたいです。「大大好きだよ。ママ。」

2023年度AED訓練器等助成事業の助成先が決定

当財団では、「安全で安心できる社会」の実現に向け、2015年度より、救命処置の普及啓発活動に積極的に取り組む団体を応援するため、公募によるAEDトレーナーや訓練用入形を提供するAED訓練器等助成事業を実施しています。2023年度も引き続きコロナ禍にもかかわらず、救命処置の普及活動に対し意欲溢れる団体から応募をいただき、以下のとおり7団体に提供しました。

団体名 [7団体] (50音順)

社会福祉法人 曙福祉会
(京都市伏見区)

京都市伏見区にある同法人の老人福祉施設、児童福祉施設にて、いざという時に迅速かつ適切に命を救えるようにするため、有資格者が他の職員を対象に救命講習を実施する等の活動を行っている。入居者、児童の保護者に加え、コロナの状況改善に伴い地域住民等も対象に救命講習の開催を計画。

五位堂地区活性化倶楽部
(奈良県香芝市)

奈良県香芝市にて、一人でも多くの人が施設に設置したAEDを確実に使用できることを目指し、AED設置施設を中心に救命講習を実施する等の活動を行っている。マンション住民、学校や老人福祉施設等の地域住民を対象に、受講側のニーズに応じて柔軟に救命講習の開催を計画。

消防救命好きサークル
(大阪市都島区)

京都市内にある市民センター等にて、地域住民を対象に救命講習を実施する等の活動を行っている。介護施設の職員や関係者、一般の方を対象にSNS掲示板等を活用して広く告知・募集し、救命講習の開催を計画。
※2022年度の助成に続き2回目の助成

Doctor's Fitness 診療所
(大阪市東淀川区)

大阪市東淀川区にある診療所および提携施設のフィットネスジムにて、同施設の患者や会員、地域住民を対象に救命講習を実施する等の活動を行っている。日頃よりラグビー選手や観客の怪我等への対応を行っていることから、今後はラグビー場の関係者や観客等を対象に救命講習の開催を計画。

防災指導会 (ぬくもり)
(大阪市平野区)

大阪市内にある地域集会場利用の各団体や就職活動中の外国人学生等を対象に、一人でも多くの人に初期防災の知識を身に付けてもらうべく、講習を実施する等の活動を行っている。コロナの状況改善に伴い受講者数を増やし、講習会の開催を計画。
※2022年度の助成に続き2回目の助成

森ノ宮医療大学ライフサポート部
(大阪市住之江区)

大阪市住之江区にある同大学内にて、同学生、特に運動部所属学生を対象とした救命処置の普及だけでなく、スポーツ大会のボランティア活動等を行っている。今後はコロナの状況改善を踏まえながら、外部への講習会も計画。
※2021年度の助成に続き2回目の助成

若者防災協議会
(兵庫県高砂市)

地域の小学生への防災リーダー育成講座をはじめ、中高生への防災授業や、地域住民を対象にオンラインも含めた救命講習を実施する活動を行っている。今後は対象エリアを広げつつ、もしもの時に行動できる人を増やすべく、幅広い世代に伝える活動を計画。

詳しくはJR西日本あんしん社会財団のホームページをご覧ください



<https://www.jrw-relief-f.or.jp/seminar/sakubun2022/>



2023年度公募助成（活動及び研究）の助成先が決定

新型コロナウイルス感染症の影響が長期化し活動や研究に様々な制約がある中、活動助成44件、活動助成(特別枠) 14件、研究助成33件の計91件の応募をいただきました。

採択されました団体や研究者の方々46件の助成先の皆様をご紹介します。当財団もそれぞれの団体や研究者の方々への支援を通じ、より一層、安全で安心できる社会の実現へ向けて少しでも貢献していきたいと考えています。

【活動助成】事故、災害や不測の事態に対する備えに関する活動、発生後の心身のケアに関する活動

テーマ	団体名 (50音順)
PTGは魔法のことは、災害のプラスもマイナスもひっくり返して心の成長をしよう!!	アジア子ども基金
自死遺族の心の傘に	池田分かち合いの会・ひかり
グリーンケア・スピリチュアルケア提供者を対象としたセルフケア講座	特定非営利活動法人 いのちのケアネットワーク
防災でつながるプロジェクト 身近な命を守るためにできること	特定非営利活動法人 HCC グループ
風水害について学べる絵本を作る	一般社団法人 ADI 災害研究所
食物アレルギー地域で考える防災講演オンライン	一般社団法人 LFA Japan
災害時のリハビリテーション支援の普及とレベルアップのための研修会開催と指導者育成の取り組み	大阪府大規模災害リハビリテーション支援研究会
障がいを持つ方への心肺蘇生・応急手当普及プロジェクト	特定非営利活動法人 大阪ライフサポート協会
ハイブリッド講演システムを活用したコロナ禍における新たな災害時肢体不自由児者支援方法の検討	環境リハビリテーション科学研究会
地域防災力向上の支援活動	救命救助研究会
防災サバイバルウォーク・防災サバイバルキャンプ	京都防災士 works (わーくす)
障害福祉・精神科医療等の支援関係者を対象としたトラウマについての研修	特定非営利活動法人 暮らしのコツ研究所
遺族会の開催・運営	けいな 虹の会
防災を「わがこと」に！ 地域コミュニティの防災力向上に寄与する防災教育	公益財団法人 公害地域再生センター
新しい命を迎える防災・減災活動	こうのとりのunit
こどもミュージアムフェスタ 2023	一般社団法人 こどもミュージアムプロジェクト協会
繋がるあんしん見守りプロジェクト	特定非営利活動法人 こもれび相談室
応急手当講習 ～出来ることがきっとある～	ちいさいたね
被害者支援コーディネーターマニュアルの作成	一般社団法人 TICC
若者と若者・若者と地域のつながりを結び直し、災害にそなえる地域散策ツアー	特定非営利活動法人 日本教育再興連盟
はすの会 東大阪・神戸の活動	はすの会 東大阪・神戸
保健室事業を軸とした、災害時に支援や配慮を要する地域住民のための仕組みづくり	一般社団法人 福祉サービスよってんか
明徳学区つたえる・つながるプロジェクト 「地域防災演劇ワークショップ」	一般社団法人 フリンジシアターアソシエーション
流産・死産経験者で作るポコズママの会	ポコズママの会 関西
阪神淡路大震災 1.17 は忘れない～まちキャラパーク in KOBE 2023	まちキャラパーク実行委員会
性・生教育プロジェクト	特定非営利活動法人 ミラクルウィッシュ

[29件]

【活動助成(特別枠)】平成30年7月豪雨(西日本豪雨)に関する被災地・被災者支援活動

テーマ	団体名 (50音順)
西日本豪雨災害で汚れた写真等をお預かりし洗浄・乾燥・拭き上げ等行いお返しする活動	あらいぐま大阪
災害を忘れないため みんなでできること第2弾	家庭文庫ぱてと*
被災の経験を未来に！！	一般社団法人 こどもスマイルミーティング*
特別枠 平成30年西日本豪雨災害で水害被害に耐えたビニールハウスの活用。被災地の景観の復興支援と障がい者就労支援	特定非営利活動法人 こもれびの里*
安心社会づくりの被災者自身の支援スキル向上の学び	三田を知る会
坂町の被災者・被災地コミュニティ形成のための集いの場づくりと内発的復興の取り組み活動	特定非営利活動法人 SKY 協働センター*
倉敷市真備町での復興支援活動「神戸から真備へ」	被災支援ボランティア団体 「おたがいさまプロジェクト」
西日本豪雨災害応援プロジェクト	ひだまり応援団*
子どもたち生まれ！豪雨に負けない心を育てる！	広島県防災ドローン研究会*
西日本豪雨災害復興支援 岡山「笑い」の復興教室	門戸倶楽部

*印は近畿2府4県以外(岡山県及び広島県)に拠点がある団体

[10件]

【研究助成】事故、災害や不測の事態に対する備えや防止に関する研究、発生後の心身のケアに関する研究

<1年助成>

テーマ	研究者名 (50音順・敬称略)
自然災害を検知可能なシート型振動センサの開発	大阪大学 特任助教 野田 祐樹
トラウマ体験者の自己客体化測定指標の開発	兵庫教育大学大学院 連合学校教育学研究所 博士後期課程1年 松岡 優菜
小学校での安全教育推進のための評価システムの構築	園田学園女子大学 准教授 山崎 雅史

<2年助成>

テーマ	研究者名 (50音順・敬称略)
南海トラフ地震発生後の救援活動における鉄道施設利用の可能性	立命館大学 食マネジメント学部 教授 荒木 一規
『生徒へのコール&プッシュ教育に至る「生命と心をく守り・育て・つなげる」養護教諭支援プログラム』の開発	兵庫県立大学 看護学部 准教授 大江 理英
学校で活用できる児童生徒の自殺予防のアセスメント方法の構築～いじめによる自殺防止の視点を含めて～	神戸親和女子大学 教育学部 教授 金山 健一
高次脳機能障害者の一般就労継続に必要な要因に関する研究	関西医科大学 リハビリテーション学部 助教 宮原 智子

[7件]

2022年度 第4回いのちのセミナー（講演概要）

グリーフを抱えて生きる

～世界の紛争地・被災地の現場から～

講師：佐藤 慧氏

認定NPO法人Dialogue for People代表
フォトジャーナリスト



はじめに

僕自身が各地で撮影してきた写真を皆さんに見ていただきながら、グリーフというのは一体どういうものなのか、そして、僕自身は自分の中でグリーフと向き合う中で何を考えてきたのか、お話ししたいと思います。

紛争地の現場から



ここにシリアのラッカという街の写真があります。この街は、いわゆる武装勢力にしばらくの間占領されていました。どのような大義があっても、戦争は奪われてしまった人の傷や痛みを延々と生み出し心の中の空白というのはずっと残り続けます。長く長くその街

に暮らす人にも、傷が残り続けるのだということを皆さんにも考えてほしいと思います。これらは遠い国の戦争の話のように思えるかもしれませんが、日常のグリーフの向き合い方と相通じるものがあるのではないかと思います。

東日本大震災の被災地の暗闇と母の死

ここからは僕自身の経験してきたグリーフを皆さんにお話しします。

僕の家族は6人家族でした。母は東日本大震災の津波で命を落としました。姉と下の弟は震災前に既に亡くなっていましたが、父も母を亡くした心の痛みと向き合う過程で衰弱し、命を落とします。ただ、これからお伝えするのは、決して単にネガティブな感情ではありません。

2011年3月11日、恐らくほとんどの方がその日の記憶があると思います。世界中のニュース番組の中で流れた黒い大きな津波が沿岸の町々をのみ込む様子に僕自身、想像をはるかに超える大災害が起きたのだと認識しました。これは父と母の命に関わる災害なんだと感じ、それからすぐに緊急帰国をし、3月13日に東京に戻ってきました。東京の明かりというものが半分以上消えていて、スーパーにはほとんど食料品もないという状況の中、なんとか手配した車で、岩手を目指します。ほどなく父から電話があり再会を果たしました。勤務していた病院は津波にのめまされたが、4階にいた父は何とか津波の引いたタイミングで屋上に避難することができ救助されたといえます。

ただ父に尋ねても母の行方はわからず、とにかく陸前高田へと車を走らせました。



その道中で目にした様子がこの写真の瓦礫です。つい1週間や10日ほど前までは誰かの日常の一部だったものです。陸前高田の市街地は壊滅的な状況でした。2万数千人が住んでいた街ですが、それが日が暮れると日常の明かりが一つもないのです。いかに多くの日常の明かりが奪われてしまったのかと、とても怖かつ

たことを覚えています。人魂を見たとの話を聞いても全然それが不思議に思えないぐらいに、被災地の後の暗闇というのは、死というものが満ちているようなそんな暗闇でした。

初めは生きた母を探していました。ただ、街を歩くと感じる潮の匂いに交じった人間の朽ちゆく臭い…。次第に生きた母ではなく、その母の遺体をなるべく早く見つけてあげる、そのために全力を尽くすようになっていました。

東日本大震災の犠牲者、2万弱と言われていますが、その数字の陰には、愛する人を亡くした人の悲しみや痛み、それを今も抱える人がいる。そう考えると、10年以上たったとはいえ、その悲しみの大きさというのは、過去のことから簡単に捉えることのできるものではないということを想像していただけるのではないのでしょうか。

発災からおよそ1か月後、母の遺体と対面できました。一緒に連れて逃げようとした愛犬のリードをぎゅっと握り締めた母の遺体は腐敗により、生前の面影がほとんど残っていませんでしたが、それでも、やっと母を見つけることができたことにとっても安堵したことを覚えています。

ただ、いまだに2千人以上の方が見つかっていません。さよならということができないといった「あいまいな喪失」をいまだに感じている方々も多くいらっしゃいます。そう考えると、本当に早い時期に母の遺体が見つかったことは奇跡的なことだと思っています。

父の悲嘆

当時の父を映した写真もあります。震災前はとても気丈な強い父だったのですが、母を失って以降、毎日涙を流すようになりました。津波にのめまされたトラウマで手が震えてしまい、医師としての仕事ができない弱い人間だと言うのです。日本各地からの頑張れという言葉に対し、頑張れない自分は駄目な人間かもしれないと自分を責める、そんな父の様子です。そういう掛け声そのものが悪いわけではありません。ただ、そのときに忘れてはならないのは、その当時、頑張れない人たちがいて、彼らは決して弱くて情けなかったわけではないということです。僕はこのとき、涙をこぼす父になぜカメラを向けシャッターを切ったのか。そのときはまだ言葉にできませんでしたが、何か弱々しい姿だけではなく、何かかけがえのない美しいものがこの父の姿から感じられたように思います。

自分自身の悲嘆と自然からの気づき

それから数年、僕自身も心がぎゅーっと閉じていくような経験をしました。震災後2年もすると陸前高田の街からは瓦礫と一緒に、昔の面影もなくなっていました、ないと分かっていますが、そこに自分のこの心の空白を埋めてくれる何かがあるのではないかと何度も陸前高田に戻り、シャッターを切りました。ただ、その心の

空白を埋めるものに出会えるわけでもなく、気がついたときには鬱の状態でした。音楽を聴いても何も感じず、物を食べても味を感じない。喪失のトラウマから人との出会いも恐ろしくなる。そんな数年間が続きました。

そうしたときに、僕自身は幸いなことに、ちょっとゆっくり休んだほうがいいよと、その悲しみと向き合う時間をいただけたんですね。それにより、少しずつ自分の心がまた息を吹き返す様子というものもゆっくりと感ずることができたんです。

岩手県のとある山の牧場を訪れた際の話です。その際、牧場長がこのような話をしてくださりました。冬って命のない季節に思えるだろうが違うんだと言うのです。

降り積もった雪は地面に接している側から山の地熱で解けていき、じわじわじわじわ時間をかけてしみ込んでいくからこそ、山の奥深くまで浸透し、この蓄えが春の芽吹き力になるんだと、冬は実は見えないところで命を育てている季節なんだと。それを聞いて僕ははっとしました。もしかしたら人間の心も同じようなリズムがあるのかもしれない。悲しみというものは単に傷ついて弱々しくて意味のないものではなくて、何かを育てている時間なのかもしれない、そう思い立ったのです。自然の何気ない木々やそこに存在する光景の美しさ、季節の変わり目に一瞬だけ垣間見える美しさや命をつなぐ生命のサイクルなども感じるようになりました。僕の見える世界が変わったからこそ、周りの世界から感じるいのちの恵みというものが変わっていったのだと思います。そうしたときに、再びあの父の写真と向き合う機会がありました。父は震災から数年後、心身ともに衰弱し、亡くなってしまいます。周囲から見ると、大切な伴侶を失い、苦しい晩年を過ごしたように見えるかもしれません。人間の悲嘆というものが、冬のような、次の季節に向けた何かを育むものだとすれば、この父の悲しみはどのような意味があったのか。自身の命がしばむほどに苦しむ—それほどまでに母のことを大切に思っていたという証でもあったのではないかと。そう気づいたときに、僕の中では父が死ぬ前に悲嘆と向き合った数年間というのは何かにつながるとても豊かなものだったのではないかと感じるようになりました。

両親からの宝物

悲しみというのは次の季節のための芽吹きなのだと言いたいわけではありません。ただ、僕自身は母の死別を経験し、その悲嘆と向き合う父、そしてその父の死と向き合った中で、自分自身の中で見える世界というものが変わっていったのです。そうした苦しみと一緒にとてもかけがえのない宝物のようなものも両親から得たと思っています。グリーフというものを乗り越えて、克服して、過去のものにしてしまうのではなく、この宝物を大切に生きていけたらなんと、そんなことを感じさせてくれた経験でした。

ご視聴された方々がこの話から何かを感じていただいたり、グリーフを抱えて生きる中で何かの支えになれば嬉しく思います。

2022年度 安全セミナー

2月23日(木/祝)、会場(ホテルヴィスキオ尼崎)及びZoomウェビナーのハイブリッド方式にて2022年度安全セミナーを開催しました。激甚化する近年の自然災害に対しては、有事の際にいかに関局的に行動できるかが重要となります。

今回は、タイムライン防災の第一人者である松尾一郎氏を迎え、タイムラインがなぜ重要なのか、その効果と今についてご講演いただきました。その講演内容の概要をお届けします。



新たな防災計画、タイムライン防災を学び、作ってみよう!

～コミュニティタイムライン、家族のタイムライン、命を守る地域の防災計画～

講師: 松尾 一郎氏

東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター 客員教授



「Wake Up Call!!」目を覚まそう!!

最初に伝えたいことは、目を覚まそう「Wake Up Call」という言葉です。アメリカではよく耳にするのですが、地球温暖化を含め、あるいは地震も含め、自然は変わっている、だから目を覚まそうよ、そう訴えかけています。

災害から命を守るために重要なことがあります。まず1つ目は危機感を持つ社会だと思います。「台風が来ているよね」、「明日は大雨が降ります」といった危機感を共有し、それに対して構える。このような危機感を持つ社会を目指しましょう。2つ目、危機感が起こるときに、どんな被害が起こるか想像しましょう。具体的に何が起こるかまではわかりませんが、想像はできます。3つ目、災害の想像に対して、どう正しい行動をするか。この3つがとても重要だと私は思っています。

今、災害が多発しています。そしてこれから更に悪化していきます。急に線状降水帯が発生して、大雨をもたらせる雨というのは直ぐには逃げられません。そんな時、それぞれのエリアで、地域の呼びかけや声かけが行われているのです。広島県坂町で、倉敷市真備町で、逃げるのは今だと。コミュニティが重要だということも、是非覚えておいてください。これまでの災害では多くの守り手の方が亡くなっています。こうした人たちが守るということも考えていくべきだと思っています。

人には避難の壁がある

人には避難の壁があります。避難の壁というのは私が作った造語なのですが、例えば「無理に留まる」があります。最寄りの自治体からの避難指示や高齢者等避難など、いろいろな呼びかけはあったが、家財道具など大事なものが、先祖代々受け

継いだものがある、簡単に動かせないものがある、それがあから逃げられないという方、子どもや孫など、携帯電話を持たせられない家族の安否確認が出来ていない、だから自分が動けないという方もいます。次に「物理的に動けない」があります。要支援者を含め、寝たきりの方が同居されている方はなかなか自分1人じゃ動けないとか、同居されている要支援者の方を動かすため人数を手当てできないという方、避難所にペットを連れていけないから自宅に残るといいます。次に「危険や危機を認知できない」、これは皆さんの中にもいらっしゃると思いますが、経験がないからどれだけ危険かという物差しがない、だから分からない等があげられます。もう1つ、正常化の偏見(ノーマルシーバイアス normalcy bias)という言葉をご存じでしょうか。自分が今いる場所は安全だと思いたい、あるいは、なるべく平静を保ちたいという災害時の心理現象のことです。最後に、リスクを過小評価したい、楽観主義があります。

これらが避難の壁です。避難の壁を乗り越えないと命は守れ

ないのです。例えば、鬼怒川が決壊したときに、茨城県常総市民2,144人にアンケートをしました。そうすると逃げなかった、避難しなかったうちの半数は安全だと思っていた、浸水しないと思っていたのです。次に、自宅に留まった理由です。これは3年前の熊本県人吉市の球磨川水害のときに人吉市民1,889人にアンケートをしました。そのうち避難する必要性を感じなかったからというのが約32%、あるいは、過去の経験から自宅まで浸水すると思わなかったからというのが約37%でした。実際に浸水したところの人たちに聞いて、多くの人たちが過去の経験から浸水するとは思わなかったと回答しています。

災害のことを常に意識しながら生活することはできません。しかし、私たちは、昔の人は自然に対して敏感に反応できていました。「何か風が違うな」、「雲行きが違うな」など、自然の変化に私たちは敏感だったはずで、動物がそうであるにも係わらず、私たちはそれができなくなり、忘れていただけなのです。

タイムラインって何なのか

2012年に米国ニュージャージー州を直撃したハリケーンの被害は、家屋の全・半壊が約4千世帯に上りましたが、作成していたハリケーン防災計画に基づいた事前避難により人的被害はゼロでした。この多くの命を救った防災計画の付属書(事前行動要領)がタイムラインの原型です。「誰が」「いつ」「何を」を明確化し、時間軸に落とし込んだものであり、台風を例にすると、縦軸に台風が最接近する5日前から、4日前、3日前、2日前、前日といった時間を、横軸に市町村、住民機関、国、交通機関などそれぞれが何をすべきかのルールを予め話し合っておく、合意しておく仕組み、これがタイムラインなのです。組織の

タイムラインもあれば、市町村の様々な機関、町内会の人たち、家族、誰が要支援者で、避難を含めて誰が支援するかを決めておく、合意しておくというコミュニティ・タイムラインもあります。言いたいのは、地域、コミュニティ、そして家族の中で行動ルールを決めておけば、ルールに従って行動することとなり、避難の壁も乗り越えることができるということです。先を見越した行動ができるというのがタイムラインの良さですが、空振りにも終わる時もあると思います。しかし空振りでも結果的に何もなくて良かった、そのような空振りを許容する社会にしないと、大きな災害には太刀打ちできないと思います。

こうしたことを全国に先駆けて実践している三重県紀宝町では、過去の豪雨災害を教訓に、町内会版タイムラインを作成し、台風接近の12時間前には高齢者の避難を終えるなど、早めの避難計画が定められています。また東京都足立区では2019年台風19号接近の際に、住民自らが作ったタイムラインに基づいて避難の呼びかけを始め、行政を動かし、足立区民3万3千人が避難しています。避難所の不足や避難所に区の職員が来ないなどいろいろな課題がありましたが、その課題をみんなで共有し、改善につなげています。また2020年7月豪雨においては、熊本県球磨村の渡地区では、作っていたタイムラインに基づき、避難の動き出しや決断も早く、また役場の避難情報や地域の呼びかけ等の情報で逃げた人が6割に上るなどタイムラインは活きましたが、球磨村や人吉市では死者、行方不明者が69人に上るなど、大きな被害が出ました。災害を経験して初めて気づく教訓があります。皆さんの行動と教訓と改善を入れていく、災害に強いまちづくり、人づくりをきちんと考えている、みんなで考えていくことが重要だと思います。

JR西日本あんしん社会財団
 2022年度 安全セミナー
 新たな防災計画、タイムライン防災を学び、作ってみよう!

避難の壁を乗り越えるタイムライン防災

正常性バイアス等を打破する方策は、行動ルール化、共有、訓練の積み重ねにある。

- 身の回りで起こる災害を想像しておく。
- 事前の防災行動計画を作っておく。
- 訓練と試行を繰り返す
- ふりかえる(検証する)
- 改善する

コミュニティや家族の行動ルールを作る

↓

タイムライン防災へ

東京大学
The University of Tokyo
© Ichiro Matsu

Interfaculty Initiative in Information Studies

まとめ

2022年6月の中央防災会議で内閣府、消防庁が主体とする国の防災基本計画にタイムラインが位置づけられました。これまでに約12年かかりましたが、タイムラインを作って、使うことで活きることが分かった事が大きな成果だと思います。

一般に災害に対しては約3割が関心層であり、4割が中間層、残りの3割が無関心層に分けることができます。

大正13年3月に発行された『大震災火災避難の心得』は、関東大震災クラスのマグニチュード8.0級の地震の体験者の声をまとめたもので、その心得の目次には、「用意周到」、「沉着機敏」、「臨機応変」という言葉が記されています。これはまさに防災につながる言葉だと思いますし、タイムラインの理念にも関わる言葉だと思うので皆さんにお送りして私の講演を締めたいと思います。

家族と私のタイムライン (タイムライン作成ワーク)

ワークでは、台風が発生し3日前からやること、1日前、12時間前、6時間前、台風最接近時のそれぞれの家族の行動を考えていただきます。台風というのは気象庁が進路を予測するため想像が付きやすく、タイムラインが作りやすいので今後地域で展開される際も、まずは台風でやってみてください。

さて、それぞれのご自宅で浸水被害が起こったとして、どのような被害が起き、どのように避難するか、予め考えていただきます。誰が何をするのかも含めて家族で話し合おうのです。これが重要です。まず3日前、これは平常時です。事前に何をしておくべきか。避難所の確認もあります。新型コロナもある中で密を避けたいとなると知人宅避難となりますが、それも確認が必要ですよ。そのときの移動手段の車について言えば、水や携帯トイレの車載は必須です。

やってみると平時に関わる事が意外に多いことに気づくと思います。その場の再確認も必要ですが予め話し合っておくことが大切なのです。交通機関も計画運休を行う可能性があればそれをしっかり伝えるべきで、その上で皆さんそれぞれがどう行動するか予め考えておくのです。だからタイムラインは皆さんのタイムラインだけでなく、行政、交通機関のタイムラインが必要であり、様々な方々が災害接近に際しきちんと動く仕組みを作っていれば命を守れるぞ、と言いたいのです。

作っていただいたタイムラインの一例を投影しました。携帯電話の充電という項目を新たに作っていただいているが、停電への一連の備えも必要です。タイムラインに正解はありません。大事なのはそれぞれが議論しておくことだと私は思います。

大型台風へ備えた 家族のタイムライン (家族の決めごと)				
■ 自宅の水害リスクと避難行動				
居住形態	戸建	自宅の浸水深 (m)	水深: 0.2m未満 水深: 0.2m以上 水深: 1.0m以上	避難場所 手段
■ 家族の行動				
ステップ	警戒レベル	必要な防災対応	家族の行動	家族の役割分担
平時の備え	年に1回 (5月末まで)	- ・水害の影響を確認する ・台風時の行動を決めておく	家族内で台風への備えや避難を相談する ハザードマップで浸水深を確認する 学校の休校や会社の台風対応を確認する	全員 父 母
1	3日前	警戒レベル1 早期警戒情報 ・台風への危機感を持つ ・持ち出し品を確認する ・雨事や仕事を調整する	ニュース、ネットで台風情報を確認する 台風の進路や規模などを確認する 交通機関の運行情報を確認する	全員 全員 全員
2	1日前	警戒レベル2 大雨注意報 ・自宅の台風対策を行う ・持ち出し品の準備を終える ・高齢者等の事前の避難	市町村の避難情報等を確認する 雨量や河川水位情報を把握する	父・母 父
3	12時間前	警戒レベル3 大雨警報 ・自宅周辺の状況を確認する ・明るい内の安全な避難	最接近時の家族の用事を確認し調整する ガラス窓の補強をするなど 自宅の点検 携帯電話充電	父・母 全員
4	6時間前	警戒レベル4 暴風警報 ・避難スイッチを決めておく ・避難完了	持ち出し袋の中身を確認する 停電・断水に備えた準備をする	父・母 父・母
5	台風最接近	警戒レベル5 緊急安全確保 (安全な場所に備える)		

会場参加の方に作っていただいたタイムラインの一例



ワーク中の様子



オンライン参加の方も、事前に送付したパワーポイントファイルを活用し、予め用意された“防災行動”のカードを並べて、タイムラインを作成いただきました。

2022年度公募助成 活動紹介

助成先団体の活動 (イベント) 内容をご紹介します



お互いさま・まびらボ [平成30年7月豪雨特別枠]

小田川河川敷にまいた麦畑の麦踏み体験 (岡山県倉敷市)

小田川河川敷を人手によって適切に整備することで流れの阻害から起こる災害を防ぐ取り組みとして、かつて生育されていた麦畑を再現するイベントが行われました。子ども達を主体に約30名が参加する賑やかなイベントであり、子ども達の楽しそうな笑顔や歓声があふれていました。豪雨災害から4年、大人も子どももそれぞれが復興の役割を担いながら真備の賑わいを取り戻そうと一生懸命に活動されている姿が印象的でした。



認定特定非営利活動法人 オリーブの家 [平成30年7月豪雨特別枠]

被災者支援・こころのケアについて考える会 (岡山県岡山市)

実際に被災地支援を行った講師の経験事例から、ボランティアスキルアップや心のケアについて考えるセミナーが開催されました。ストレスやトラウマのメカニズムを学ぶ場面では、「自律運動による心と体の自己回帰法」について講義があり、ストレスやトラウマを負った方の自律神経を「安全で安心」な状態に戻すための呼吸と動きを実際に体験する時間もありました。コミュニケーションを図りながらの和やかな雰囲気、参加者は体を動かし“リセット”を体感していました。



特定非営利活動法人 全日本企業福祉協会

高齢者運転能力チェックセミナー (滋賀県草津市)

高齢期の身体能力の衰えからくる運転能力の弱点を学び、自身で運転免許返納について考える力を育てるセミナーが開催されました。統計データ等をもとに「なぜ高齢期に事故を起こしやすくなるのか」学んだ後、認知機能検定の模擬テストが実施されました。このセミナーでは自治体や企業の免許自主返納支援制度の紹介があり、返納によるメリットも示し、“免許返納後も様々な支援を利用して自分の足で外にでかけよう”と呼びかけるような前向きなセミナーでした。



特定非営利活動法人 いのちのケアネットワーク

グリーフケア・スピリチュアルケアに取り組む人のための小さなグループワーク (大阪府大阪市)

グリーフケア・スピリチュアルケア提供者を対象に、自身のセルフケアを目的とした少人数グループワークが開催されました。スピリチュアルケアの専門資格をもったファシリテーターも同席し、自身の気持ちを吐露する時間を一人ひとりにしっかり設け、参加メンバー同士のピアサポートを感じる場づくりにも努めており、参加者が心の深部まで打ち明けられることができるような工夫がされていました。参加された方は、言葉にしてみても自分の深層にある考えや思いに気づいた様子でした。



特定非営利活動法人 SKY協働センター [平成30年7月豪雨特別枠]

公営住宅での交流サロン (広島県安芸郡坂町)

西日本豪雨で被災し災害公営住宅で暮らしている住民向けに、交流サロンが開催され、さくら餅づくりと木工での棚作りが行われました。会話をはずませながら手際よくさくら餅をつくる女性陣と、テラスで棚作りに精を出す男性陣、それぞれに交流を楽しまれており、いつも支援に来てくれる学生ボランティアも一緒になりみんなで笑顔あふれる賑やかな時間を過ごされました。こうした活動があることで、地域コミュニティを再生させ、被災地の内発的復興に繋がるように感じました。

いのちのセミナー (WEB) 再配信のお知らせ

視聴者の皆さまからのご要望に応え、2020年度から2021年度前半に配信したセミナーを改めてお届けします！

いのちのセミナー (WEB) 再配信は、当財団ホームページにて配信中

配信期間：2023年3月22日 (水)～2023年6月30日 (金)

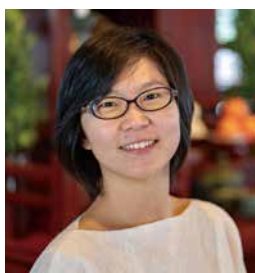
いのちのセミナー

検索



いのちのセミナー講演録(要約) [ホームページに掲載] もあわせて、是非ご覧ください。

2020年度 第1回いのちのセミナー **なくしたものとつながる生き方 ～グリーフを感じるままに～**



おかく てるみ
講師：尾角 光美氏 一般社団法人リヴオン代表

19歳で母を自殺により亡くし、その後もうつや不眠など、グリーフからくる心身のさまざまな反応に長年苦しみました。しかし、その過程で、悲しみと悲しみが出会うと希望になること、人とのつながりの中で生きる力が培われていくことを知りました。グリーフとは何か、また、グリーフサポートとは何か。日本の仏教は優れたグリーフサポートである点などについてお話しします。

※2020年12月～2021年3月に配信したものです。

2020年度 第2回いのちのセミナー **繋がりの中で生きる ～修験道に学ぶ～**



たなか りてん
講師：田中 利典氏 総本山金峯山寺長 種智院大学客員教授

修験道は、日本古来の山岳信仰に神道や外来の仏教、道教などが習合して成立した我が国固有の民俗宗教です。修験とは「実修実験」あるいは「修行得験」という意味であり、実践を重んじる山伏の宗教でもあります。その修験道の実践を通じて学んだことから、「繋がりの中で生きる命」の大切さについてお話しいたします。

※2021年3～6月に配信したものです。

2021年度 第1回いのちのセミナー **いのちのゆくえ ～自分らしさを生きる～**



ささき じとう
講師：佐々木 慈瞳氏 公認心理師・僧侶

コロナの蔓延により、生と死は常に身近となり、誰もが「いのち」に向き合っています。「いのち」はどう育まれ、どこに向かうのか。人生をかけて積み上げてきた営みは、未来につながっていくのか。私が日々に出会う子どもたちや、患者さん家族さんが教えてくれたことを交えつつ、「いのち」を見つめてみたいと思います。

※2021年6～9月に配信したものです。



アンケート実施中

毎号、皆様からご好評いただいておりますReliefにつきまして、いつもご感想をお聞かせくださり、ありがとうございます！今号についてのご意見やご感想もお待ちしております。

(<https://www.jrw-relief-f.or.jp/enquete/>)



編集後記

今号では「いのち」の作文コンクール表彰式や安全セミナーの会場開催の様子を掲載しております。久々にセミナー会場へお越しいただいた方にもお喜びいただけたようで、財団一同無事に開催でき大変嬉しく思っています。アフターコロナ到来を予感させる今日この頃ですが、何より皆様の安全・安心を第一に、会場開催の準備、運営に努めてまいります。(なお)

広報誌「Relief」 2023年4月号(vol.46)

[表紙写真：2022年度 小・中学生「いのち」の作文コンクール 表彰式の様子]
Relief(リリーフ)には「ほっとする、安堵。安心」といった意味があります。

JR西日本あんしん社会財団は、福知山線列車事故の反省の上に立ち、設立されました。「安全で安心できる社会」の実現に少しでもお役に立てるよう、事故や災害等で被害に遭われた方々の心身のケアに関わる事業や、地域社会の安全構築に関わる事業などに取り組んでいます。

編集発行/公益財団法人JR西日本あんしん社会財団

〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号 TEL: 06-6375-3202 ホームページ: <https://www.jrw-relief-f.or.jp/>



ホームページ



Facebook

